

NGOが抗生物質

ペスト禍のインドに援助

インド西部を中心に大流行し

ているペストの治療に必要な抗生物質約二十万錠などを日本の非政府組織(NGO)が十九日、現地へ緊急輸送する。現地では流行はヤマを越えたとみられているものの、隔離患者は六千人を超えており、抗生物質不足で死者が増える恐れがあるといわれている。今回のペスト禍では、政府が緊急援助を実施しているが、民間団体の支援は初めて。

この団体はアジアやアフリカで内戦や災害にあった難民の緊急医療活動などにあたっているアジア医師連絡協議会(AMDA、本部・岡山市)。

インド西部でペストが広がり始めた直後の九月二十六日、発生地域に近いボンベイで活動しているAMDAインド支部から「ペストに効果のある抗生物質テトラサイクリンを二十万本から五十万本、緊急に送ってほしい」との要請が入った。

AMDAで早速、国内の製薬会社などに当たったが、在庫が少なく、とりあえずカプセル十六万錠、錠剤三万六千錠、注射液五千本を集め、緊急輸送することになった。十九日午後、関西国際空港からエア・インディア機でボンベイに送る。

この抗生物質は、AMDAインド支部の医師団が赤十字と協力してボンベイを中心とする地域での治療に使う。

外務省によると、九月下旬に発生が明らかになったインドのペストは、これまでに疑似患者を含む隔離患者が六千四百二十六人、このうち真性患者が三百二十二人に上り、死者も五十六人出ている。現地では抗生物質が不足しており、死者はさらに増える恐れがあるという。

日本政府はインド政府の要請を受けて、欧州などでテトラサ

イクリンのカプセル三百三十万錠を調達、今月十日、インド保健省に引き渡している。

AMDAでは現地の状況や要請に応じて、今後も緊急輸送を検討するという。